

ガリラヤ湖より、こんばんは。今、アメリカは午後、アジアは真夜中ですが、たった今、ジョン・ケリーの演説を聞き終えました。彼には、中東和平のビジョンがあったようですが、私はとても驚きました。ジョン・ケリーが中東の平和についての自らの視点を、一時間にもわたって演説しました。彼の任期終了まで残り2、3週間。オバマ政権は、バラク・オバマが理由も分からず、理解もせずに受賞した、ノーベル平和賞を正当化する時間が8年もあったのです。なぜ彼が受賞したのか、だれにも理解できないでしょうし、彼自身も理解できていないと思います。それでも8年の間で、彼は中東が自分の思っていたのとは違うことに気付いたでしょう。中東の誰もがあらゆる点で理解しているのは、オバマ政権は中東に関する外交政策においては、可能な限りの失敗をし尽くしたということです。間違った人選に始まって——エジプトでは指導者にムハンマド・ムルシを選びました。神に感謝なことに、彼は取り除かれましたが。リビアで、シリアで、当然他の地域で起こったことも同様です。

ところが、イスラエルの事となると、常に念頭に置いておくべきは、西岸地区のどこであっても、国務省はイスラエルの入植に反対します。しかし、大部分では誰もが、イスラエルがエルサレムの旧市街に戻ったという事実は尊重し、私たちが祖国に戻ったのだということは明白で、誰にも否定はできません。ここはユダヤ人にとっては3000年来の歴代首都ですから。イスラムが誰かの脳裏に浮かぶ遥か以前です。コーランの中にエルサレムは一度も出てきませんし、また、この都から発掘された何百万という遺物からも、ここがユダヤ人の場所であるということが理解できるでしょう。実際、今私が身に着けているこのネックレスのコインは、およそA.D.135年のもので、このコインには「エルサレムの解放」と書かれています。2世紀、すでにユダヤ人はローマを相手に大暴動を起こし、エルサレムの解放を願って戦っていたのです。彼らは、エルサレムが解放されて再びユダヤ人の首都となるのを見てはいませんが、私が1972年にエルサレムで生まれた時は、イスラエルの首都であり、解放された都でした。

では、ジョン・ケリーの演説と、それから国連安保理で投票され、受け入れられた決議とを理解することが、なぜそれほどまでに重要なのか、内容に入る前に、背後で行われていたことについてお話しします。

まず第一に、アメリカは昨日（私が「アメリカ」というとき、どうかご理解いただきたいのは、アメリカのクリスチャンではなく、政権のことを指しています）、国連決議とのあらゆる繋がりを否定しました。あれは彼らがしたことではない、と。そしてその背景のすべてが、エジプトの新聞でリークされました。その新聞社はリークのみならず、実際2週間前の12月半ばに、パレスチナ代表団がアメリカで、ジョン・ケリーと国連大使、その他の人物と会合していたことを明らかにしました。つまり基本的に、彼らが共に決議を立案したわけです。新聞には、現エジプト大統領アッシーシの公式発言の場で、その会合の議定書全文が掲載されました。そこでホワイトハウスが、彼らもこの立案に関わったことを白状したのです。つまり最初は「自分たちには全く関係ない」と言っていたのが、「自分たちも関与した」と言うのに変わったのです。しかし、彼らが言わないのは、自分たちが取りまとめただけでなく、他の国々に強制して棄権させるのではなく、賛成票を投じさせた、ということです。

次に、なぜ私がこんなことを言うのかというと、それは、ジョン・ケリーが「イスラエルとアメリカがどれほど親しいか」とか、「オバマ政権は歴史上最もイスラエルと親しい政権です」と言ったからです。それについて、ご説明しましょう。友達というのは、友に隠れてコソコソとこんな風に恥をかかすようなことはしないものです。もし、何か言いたいことがあるなら、私のところに来て話すでしょう。もし何かに投票するのなら、少なくともその前に伝えてくるでしょう。しかし、彼らがやったことは、陰で全ての事を誤魔化したのです。我々はそのことを知っていましたが、アメリカが棄権するのか、拒否権を行使するのか、ギリギリのところまでわからなかったのです。どうすることも出来ませんでした。オバマ政権がギリギリになってから知らせてきたことでしたので、我々は実際に投票が行われるまでは、大したことが出来なかったのです。そして投票が行われたその時、イスラエルは放り出されました。その時に全ての外交の規則が破られたと思っています。アメリカのやり方だけでなく、イスラエルの首相の反応にもそのことが見て取れるでしょう。駐米イスラエル大使は、基本的に以下のように述べました。

「オバマ政権がこの全貌を取り仕切っていたことは知っていた。」

我々はこれまで、こんなことを言ったことは一度もありませんでした。もし我々を友達だというのなら、アメリカは少なくとも、事前に我々に話すべきです。

さて、次に投票に続く宣言について、お話ししましょう。一時間ほど前に、ジョン・ケリーが発言した内容は基本的に次のようなものです。

① 「我々は二国解決案を命じる。」

その解決案とは、イスラエルはユダヤ人国家、パレスチナはアラブ人国家。それについては、構いませんよ。ただ、説明すると、この全ての二国解決案はすでに、1947年に国連によって提示されているのです。そして、それをアラブ人は拒否し、ユダヤ人は受け入れました。恐らく、皆さんには初耳でしょう。しかし、1947年11月29日、イスラエルは——というより、イスラエルでもなく、ユダヤ人はエルサレムを手放すばかりではなく、ガリラヤまでも手放すという策を受け入れたのです。当時、我々は所有すらしていませんから、ユダヤ、サマリヤについては、名前さえも出てきませんでした。それでも我々は「Yes」と言い、アラブは「No」と言ったのです。なぜなら、彼らの言い分は「全てか、あるいは皆無か」だからです。今日の今日まで、彼らの旗はすべてがパレスチナです。ヨルダン川西岸地区とガザだけではなく、彼らの旗、勲章、彼らが教えていること全て、教科書、彼らの地図ではイスラエル全体が、パレスチナなのです。

② 「土地の交換が行われる前の、1967年の国境に戻しましょう。なぜなら、大きな町などいくつかは、イスラエルがパレスチナに返還できない地域があるから。」

言わせてもらいますが、所有したこともない者に、どうして返すことができるのでしょうか？「占領」と言うからには、何かを所有している者から占領することを言うのであって、パレスチナ人は国を所有したことがなく、我々は彼らから土地を奪ったことはありません。1967年、我々は戦争によってあの地域をとりましたが、あそこはヨルダンの支配下でした。ですから、我々はヨルダンと戦ったのです。ヨルダンは英国から取り、英国はトルコから取ったのです。何千年も前から我々が所有していたものを、

我々が取り戻したのです。しかしながら…、次に行きましょう。

③ 「エルサレムはパレスチナ、イスラエル両国の首都となる。」

さて、アラブ人は町全体を要求しています。そして、我々は「No」と言っています。我々は絶対に嘆きの壁、ユダヤ人地区である旧市街を手放しません。ここで問題が生じているわけです。根本的には、われわれも多くの部分で賛成はできます。しかし、エルサレムの事となると、首都が分断されることを容認するイスラエル人は、誰一人としていないでしょう。ジョン・ケリーは「エルサレムは分断されない。ただ両民族の首都となるだけだ」と言いました。では、一つの都市を分断せずして、どのように二つの国の首都とするのでしょうか？どこにイスラエルの警察を置き、どこにパレスチナの警察を置くのですか？銃を持ったイスラエルの警察官と、銃を持たないパレスチナの警察官を、どう一緒にするのですか？私たちは、この演説全体がめちやくちゃであることを理解しなければなりません。幻想の上に立って行われたのか、あるいは演説の前に悪いドラッグでもやったのか何なのか、分かりませんが、ただ私には理解しかねるのです。私は、ジョン・ケリーは優秀な人だと思っていましたが、そのような人物が、どうすれば一方で両国の首都だといい、またもう一方で分断しないなどと言えるのでしょうか？これは矛盾することです。

もう一つ説明させてください。パレスチナはイスラエルがユダヤ人国家であるということ自体が気に入らないのです。彼らの言い分は、「パレスチナはアラブ人国家で、イスラエルはユダヤ人国家ではない。」「イスラエルの中にアラブ人も住んでいるのだから、ユダヤ人国家とは言えない。」というものです。彼らは、一方ではユダヤ人を排除し、そしてもう一方で、我々の国においてはアラブ人と共存しています。彼らの国は100%アラブ人で、我々の国はユダヤ人との共存という。つまり要点は、この演説が実に胡散臭いということです。一つにそのタイミング、二つ目にその内容、そして三つ目にその中に流れる霊が、です。それら全てが、聖書の中に書かれた二つの聖句を彷彿とさせます（ネヘミヤ記2:19～20、ゼカリヤ12章）。一つは、当然否定できない事実、他の誰でもなく、イスラエルだけがエルサレムの相続と権利を持っています。以前も、ユネスコの決議（2016年10月27日アップデート）の際にお話ししましたが、——つまりネヘミヤがイスラエルに戻ってきたときの話です（ネヘミヤ記）——ネヘミヤは、ペルシャの王アルタシャスタによって、送り出されました。覚えておいででしょうか？その時、人々が彼を見て言ったことを読んでみましょう。彼がエルサレムに戻る途中、幾人かの人が彼を見たのです。

19 **ところが、ホロン人サヌバラテと、アモン人で役人のトビヤ、および、アラブ人ゲシエムは、これを聞いて、私たちがあざけり、私たちがさげすんで言った。**

「おまえたちのしているこのことは何だ。おまえたちは王に反逆しようとしているのか。」

（ネヘミヤ記2:19）

ネヘミヤの、自分の故郷への帰還を、世はある種の反逆だと解釈しました。今も全く同じです。ユダヤ人の、故郷への帰還が、世界からは反逆だと見られています。そして、世界最強国の国務長官が、一時間も費やして、我々が家を建てることに関して、講釈を垂れるのです。それも、テロ攻撃と同列に扱っ

て、「お前たちは家を建て、彼らはテロ攻撃を仕掛けている！」と。どうすれば、家を建てるのが、バスを爆破したり、人を殺めたり刺したりするのと同列に扱えるのですか？しかし、彼はそう言います。彼の演説はそういうことなのです。おかしなことに、ケリーはテロについては3秒ほど話し、家については45分も費やしたのです。

さて、次を見てみましょう。ネヘミヤが言ったことに注目してください。

20 **そこで、私は彼らにことばを返して言った。「天の神ご自身が、私たちを成功させてくださる。だから、そのしもべである私たちは、再建に取りかかっているのだ。しかし、あなたがたにはエルサレムの中に何の分け前も、権利も、記念もないのだ。」**

(ネヘミヤ記 2:20)

ネヘミヤは「我々は立ち上がって戦う、防衛する」とは言っておらず、「私たちは再建に取りかかっているのだ」と言っています。私が今、全世界に伝えようとしているのはこれです。我々はここで、戦争を仕掛けたり、防衛しようとしているではありません。ただ建てているのです。これは神が我々に与えた命令です。「故郷に帰って再建しなさい」と。そして面白いことに、ケリー国務長官の脳内では、「占領」とはテロリストではなく、建てることのように！ネヘミヤは再建について言及しただけでなく、アラブ人、アモン人、ホロン人に向かってこう言っています。

20 **「…しかし、あなたがたにはエルサレムの中に何の分け前も、権利も、記念もないのだ。」**

(ネヘミヤ記 2:20)

あなたがたには、エルサレムについての聖書的な土地も、物質的な権利も何もない。法的に何の権利もない、霊的な記念も何もない。そして私も今、全く同じ言葉が言えるのです。パレスチナ人に言います。あなたがたには、法的に何の権利もなければ、物理的に何の分け前もない。(配信が途切れる)

すみません。Facebook が途切れてしまいました。原因はよく分かりませんが、ネヘミヤ記を引用していたところでした。それから、当時と現在とでは違うことを話していました。なぜなら、現在は世界の国々は3民族だけではありませんから。世界の国々はまだ準備が出来ておらず、イスラエルがエルサレムを維持することを許しません。面白いことに前にも言いましたが、聖書預言はこの全てについて、エルサレムが全世界の問題になる、と伝えています。それに関しては、もちろん、ゼカリヤ書 12 章にあります。

1 **宣告。イスラエルについての主のことば。**

——天を張り、地の基を定め、人の霊をその中に造られた方、主の御告げ——

(ゼカリヤ書 12:1)

面白いですね。ここで神についての、詳細なプロフィールが記されています。ただ「イスラエルの神」だけではありません。主は地の基を定められた方です。主は侮られるような方ではありません。弄ばれたり、嘲られるような方でもありません。主は地の基を定められ、「人の霊をその中に造られた」方なのです。ゼカリヤは最重要預言の中で、神のご性質をこのように説明しています。

- 2 **見よ。わたしはエルサレムを、その回りのすべての国々の民をよろめかす杯とする。ユダについてもそうなる。エルサレムの包囲されるときに。**
- 3 **その日、わたしはエルサレムを、すべての国々の民にとって重い石とする。すべてそれをかつぐ者は、ひどく傷を受ける。地のすべての国々は、それに向かって集まって来よう。**

(ゼカリヤ書 12:2~3)

ここに注目してください。ケリーの言葉を借りると、パリ「和平」会議が1月15日に開催され、そこで彼らは話し合うのですが、そこで仮にその中の一国がアメリカに説き伏せられて、演説や国連安保理決議として、パリ和平会議で協議される下地や概要を敷いていたとしても、私は驚きません。世界中の国々がエルサレムについて対処すると書かれています。考えてもみてください。ダマスカスは火の海、アレッポも崩壊、モスルも陥落しています。シリアだけでも、この5年間で50万人が惨殺されているのです。しかし、世界はこれらのどの地域に対しても解決策を見いだせず、彼らの頭の中にあり、憑りつかれているのは、ただエルサレムだけです。イスラエル—パレスチナ問題です。面白いことに、アメリカとヨーロッパが率いるアラブの働きで、スンニアラブ界では今、あまりに多くの事件が勃発しているので、パレスチナ問題は彼らの中ではそこまで重要ではないと考えられています。シーア派の拡大—実際、イランに対抗する全ての事について、彼らにとってはイスラエルが唯一信頼できる国なのです。それら全てをひっくるめて、アメリカ・ヨーロッパの利益のためにエルサレムを分断する何らかの計画の先鋒になるのでしょう。

聖書には、主がそれをご存じだと告げています。主は、彼らをエルサレムに手出しするようにと仕向けられるのではないのです。主は、これら全ての事について、彼らが傷を負うようにされるのです。神が「ここはわたしの地。わたしの名前をここに置く」と言われた場所は、世界中どこの都市でもなく、唯一エルサレムだけです。そして、世界中がエルサレムを、その所有権を持つ人々から取り上げ、分断しようとしています。主はこう言われます。

- 3 **その日、わたしはエルサレムを、すべての国々の民にとって重い石とする。すべてそれをかつぐ者は、ひどく傷を受ける。地のすべての国々は、それに向かって集まって来よう。**

(ゼカリヤ書 12:2~3)

来月、彼らがパリに集まるのも興味深いことと思いませんか？そしていずれ彼らはエルサレムに集まります。聖書にはゼカリヤ書 12 章と 14 章に、その事実が書かれています。

1 **見よ。主の日が来る。その日、あなたから分捕った物が、あなたの中で分けられる。**

2 **わたしは、すべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。町は取られ…**

(ゼカリヤ書 14:1~2a)

ですから神は、彼らが自分たちの欲望を果たすことを許されるのです。それが多くの場合、主のやり方なのです。しかし、彼らは失敗し、崩壊し、敗北します。では誰が彼らを敗北させるのでしょうか？聖書によれば、これが面白いことに、戦うのはイスラエルの軍隊ではなく、F-35でもなく、アメリカ製の戦車でもありません。3節にはこうあります。

3 **主が出て来られ、決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。**

4 **その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。…**

(ゼカリヤ書 14:3~4a)

ですから、エルサレムを分断しようとする外交的な働き、全世界がイスラエルに敵対しようとしています。今はまだ、外交的な領域です。しかしいずれ…ちなみに言うておきますが、これらの事はすべて携挙の後に起こります。イエスの足がオリーブ山に降り立つということは、キリストの再臨を表しており、聖書はその事実を5節の終わりにこう記しています。

5 **…私の神、主が来られる。すべての聖徒たちも主とともに来る。**

(ゼカリヤ書 14:5b)

私たちもイエスとともにエルサレムに戻ってきます。そして、エルサレムに憑りつかれた世界の国々によって最終的に扇動されて起こる戦争を終わらせるのです。要点は実に明確です。エルサレムは、神にとって、主ご自身が戦われるほどにとっても大切なのです。

今、私たちが生きている時代は、全てが外交的領域で起こっています。ケリーの演説や、国連投票、パリ和平会議。それから恐らく、トランプがエルサレムに領事館を移動するでしょう。しかしこれらはすべて、布告のレベルです。しかし、全世界が実際に攻め込んで来るほどに、エルサレムが世界にとって大きな問題となる時がやって来ます。そして、主ご自身が戻って来られます。それはイエスの再臨の時です。私たちにとっては、主とともに戻ってくる時です。そしてもちろん、エルサレムは永遠に解放されるのです。なぜなら、イエスがエルサレムに千年王国を創られるからです。ちなみに、この千年王国のエルサレムは、イエスが戻って来られるエルサレムとは異なります。それは、ゼカリヤ書 14章にこうあるからです。

8 **その日には、エルサレムから湧き水が流れ出て、その半分は東の海に、他の半分は西の海に流れ…**

(ゼカリヤ書 14:8a)

そして、その中央に都が創られるのです。素晴らしく、美しい！それでいて今、私たちは驚くべき時代

を生きているのです。携挙の後に起こるゼカリヤ書 14 章が、今現在、世界の指導者たちの頭と心の中で整いつつあります。そして、そのこと全てが、携挙が非常に近いことを物語っています。これが 2017 年のテーマだと私は思っています。

このメッセージは BEHOLD ISRAEL のイスラエル在住メシアニックジュー Amir Tsarfati 氏が公開したメッセージを、アメリカ在住の日本人クリスチャン木下言波が翻訳して YOUTUBE やブログに上げたものを文字化したものです。リアルタイムで知りたい方は、BEHOLD ISRAEL (英語)、「DIVINE US」(日本語)を検索してください。世界的なインターネット規制が始まろうとしています。私達はその日のために、文字にして紙に記録する必要を感じました。また、インターネットに不慣れな方や字幕を追って読むのが困難な方のためにも必要があると主に迫られたと感じます。

※インターネットのメッセージを、文章化するこの働きを始めた姉妹が、現在目を患って治療中です。どうか、りよくさんの為にも、お祈りください。

「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにはならない。」ヘブル 4:7

メッセージ by Amir Tsarfati/Behold Israel : <http://beholdisrael.org/>

訳 by 木下言波 DivineUS : <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

筆記 by MIHO